

工学アカデミアの実現をめざして

Pursuing the Realization of an Engineering Academia

本学園は、学生・理事・教職員が三位一体となつて、学園共同体（工学アカデミア）が目指す価値の共有を大切にしています。

学園とは、志高い人々の集団として、多様な文化を尊重し、知識を知恵に変容できる人材が生まれ出る場でなければなりません。

私たちは「社会から信頼され、必要とされる学園」となる工学アカデミアの実現を目指します。



学校法人 金沢工業大学



人間形成 技術革新 産学協同 の旗を掲げ

無くてはならぬ 学園を
無くてはならぬ 人材を
求めて三十年
堅忍不拔 全学一致
犬鷲の 天翔けるが如く
さらに 力めん
さらに 励まん

昭和62年6月1日
学校法人金沢工業大学
学園長 泉屋 利吉
「建学の塔」より

目次

学校法人金沢工業大学建学綱領	1
本学園の使命	1
教育原理の焦点	1
学園共同体の倫理	2
われらの行く栄光の道	2
三大建学旗標	3
学園の学章	3
学園のビジョン	4
学園共同体の理解	4
学園共同体の理想	5
学園共同体の信条	6
教育の卓越性について	7
研究の卓越性について	10
サービスの卓越性について	13
KIT／ICTスクールシステム	17
国際高専 2025 In Sight	19
1. リーダーシップコンピテンシーを育成	19
2. 理工系リベラルアーツ教育を実践	21
3. グローバル教育の発展	21
4. KITスクールシステムの確立	22
5. 最上のラーニングコミュニティの形成	23

学校法人金沢工業大学建学綱領

本学園の使命

日本の学校教育法は「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道德的及び応用的能力を展開させることを目的とする。」「高等専門学校は、深く専門の学芸を教授し、職業に必要な能力を育成することを目的とする。」と述べています。

また、アメリカの故ケネディ大統領は、1963年6月10日アメリカン大学の卒業式において『平和の戦略』と題する演説を行いました。この演説はあの有名なリンカーン大統領の『ゲチスバーク演説』に比すべき歴史的な演説といわれています。彼はその中で「この地上にあるもので大学ほど美しいものはないであろう。大学は無知を憎む人々が知ることに努め、真理を知っている人々が、他の人々の眼を開かせようと努める場であるからである。」と、彼らしい格調の高い言葉を引用して大学の使命を語っています。

これら二つの表現において、学校教育法は学理的に、ケネディ大統領は高踏的に、それぞれ大学の使命を定義づけています。たしかに、大学は学術の中心であって、常に高度の教育実践と斬新な研究活動を行い、日本及び世界学術の進歩と国際文化の向上に寄与することを使命とし、高等専門学校は、産業日本の発展を担う優秀な技術者を育成することを使命としているのであります。

教育原理の焦点

さらに、一般的教育とは、哲学者フィヒテの唱えるように、人間自身を形成することであり、人間を彼自身たらしめることであります。また、教育学者ナトルプのいうように人格を陶冶することでもあります。陶冶とは個人の完全なる形成を意味します。

それゆえ、学園の使命を具体的に挙げれば、人間形成、学術探究及び職業教育の三つの項目を数えることができます。この三つの項目は、いずれも重要な意義を持っていますが、窮極においては、人間形成に重点を置いているのであります。要するに、学術研究、職業教育によっても人間形成は可能ではありますが、人間形成を除外して、学術探究も職業教育もありえないのであります。したがって、使命の本質は、最高の知能と深奥な教養のある指導的人間の育成の場であると断言してよいと思うのであります。

このように、学園を人間形成の場として重視すれば、学生生活はただ単に教室、実験室及び図書館にのみあるのではなくて、その文化活動、体育奨励、寮生活の指導、厚生施設、衛生管理、生活相談及び就職斡旋などあらゆる部門、すなわち常住坐臥そのものが重要な意義を持つことになります。

学園共同体の倫理

以上の観点に立てば、人間形成ということは、官学たると私学たるとを問わず、およそ共通の最大の使命であります。特に私学においては、教育の担当者は、ひとり教授のみならず、広く理事者及び職員をも含むべきことを理解せねばなりません。したがって、本学園においては理事、教職員及び学生の三位一体の学園共同体を築き上げることによって、真に人間形成の場となし、民主主義日本の期待する人間像の生まれ出る温床とすべきであります。

しかも、私学は官学に比較して、私立学校法によって一定の基準を守り、監督を受けねばならないとしても、複雑な法的規制や煩瑣な官僚統制を免れて、はるかに自由な立場にあります。戦前においては、私学に対する当局の監督統制は、今日よりは、はるかに厳格を極めていましたが、それにもかかわらず、私学は、それぞれ独自の伝統と堅実な学風を育て上げたのであります。

いずれの私学においても、その経営の企画と財政の確立のために多大の苦慮を払いながら、なおかつ香り高き矜持を失わないのは、実にこの自由の立場が存在するからであります。それゆえにこそ、本学園においては、技術時代に先駆する革新的な産学協同方策を高く旗標として掲げて、経営管理の最高責任者である理事会は、教育研究の直接担当者である教職員及び研学当事者である学生の全面的な協調を得て、その抱負経綸を実現するため、私学の特長を遺憾なく発揮して縦横自在な活動を行い、高邁な学風を築かんとするものであります。

見られよ。古き校史に彩られた私学の中には、その創設者の人格と識見によって建立され、長き歳月と烈しい風雪に耐えて鍛え上げられ、独自の伝統と質実な学風を誇っているものが数多く存在しているのであります。例えば早稲田大学における大隈精神、慶應義塾大学における福澤精神、また、同志社大学における新島精神のごときであります。本学園においても、ここに述べる建学綱領を基盤として日本の学界に垂範する崇敬に値する風格を樹立せねばなりません。

われらの行く栄光の道

戦後におけるわが日本の経済的発展は、敗戦という同じ運命を辿り、ともに復興の道を進んだ西ドイツの奇蹟的發展を、はるかに凌駕する神秘的発展を遂げたのであります。この偉大な成果は日本人の知能と技術と勤勉の総合的所産であります。

いまや、本学園はこの偉大な民族的栄光をバックボーンとして、郷土石川県、北陸三県、中部圏及び日本海沿岸地区の地域開発のための学術的母体と技術的基地の主役を演ずるとともに、さらに世界市場に挑戦する産業日本の要求する最優秀な技術者と最上級の経営者を養成すべき重責を双肩に担っているのであります。

進んで将来は、現代アメリカの科学技術の聖地ともいふべきマサチューセッツ工科大学の運営方針に学んで、日本の宇宙開発より産業社会学に至るまで、最高水準を誇る第一流の学園たらしめんとする大志を実現して、民主主義日本の学界に偉大な栄光を捧げんとするものであります。われわれは、この国家的至上使命を遂行するために本学園のあらゆる機能を結集して、その共同的総力を挙げて精進する決意を持たなければなりません。

昭和40(1965)年2月発表

三大建学旗標

金沢工業大学及び国際高等専門学校は、学生、理事、教職員が三位一体となり、学園共同体の理想とする工学アカデミアを形成し、学園創設理事である泉屋利吉翁が定めた三大建学旗標の具現化を目的とする卓越した教育と研究を実践し社会に貢献します。

高邁な人間形成

我が国の文化を探究し、高い道德心と広い国際感覚を有する創造的で個性豊かな技術者・研究者を育成します。

深遠な技術革新

我が国の技術革新に寄与するとともに、将来の科学技術振興に柔軟に対応する技術者・研究者を育成します。

雄大な産学協同

我が国の産業界が求めるテーマを積極的に追究し、広く開かれた学園として地域社会に貢献します。

学園の学章



「三大建学旗標」

人間形成

技術革新

産学協同

三位一体の「学園共同体」

学生

理事

教職員

科学技術を学ぶ者への指針を示す「3つの“T”」

Truth
真理

Theory
理論

Technology
技術

以上の3つの要素を、学園のシンボルであるゴールデンイーグル（いぬ鷲）の翼をモチーフにデザインしたものです。

白山に棲息する天然記念物ゴールデンイーグルは、光に向かって進むとき頭部が金色に輝く特徴を持っており、鳥類の中では最も高空を飛翔する勇敢な鳥と言われます。そのゴールデンイーグルの力強いイメージは、勇気と信念を象徴しています。

学園のビジョン

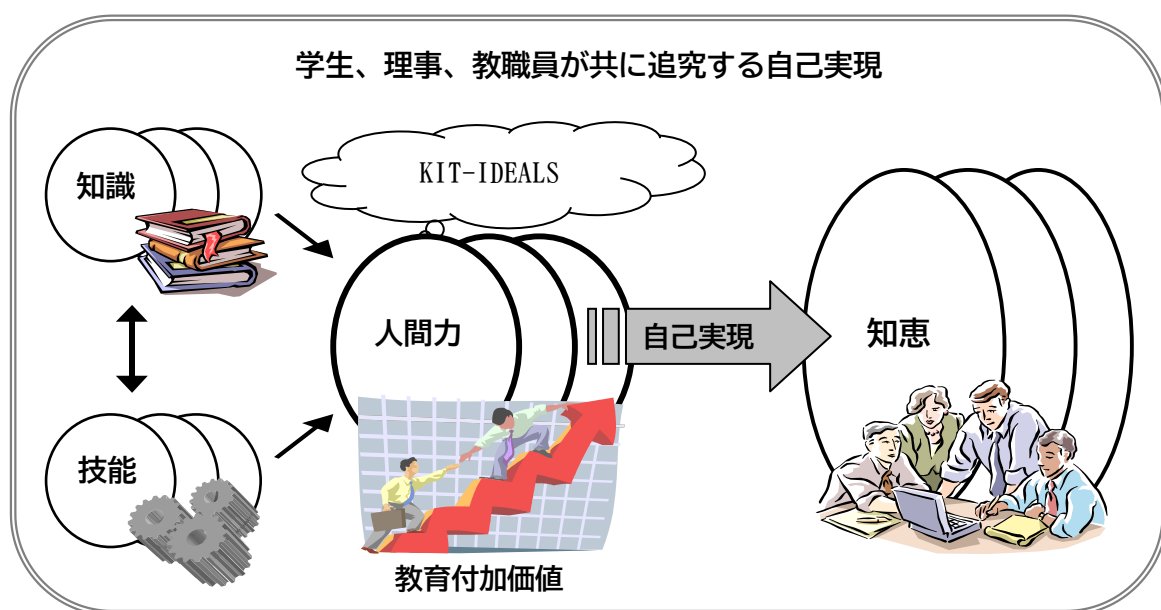
私たちは、学園を構成する人々（学生、理事、教職員）が共有する経営理念と価値群に基づく明確なビジョンを掲げ、社会が必要とする教育、研究、サービスの継続的な改善活動に努めると共に、その卓越性を追究し、社会に貢献します。

- ① **教育の卓越性**：人間形成を目的とする「教育付加価値日本一の学園」を目指します。
- ② **研究の卓越性**：「共同と共創による技術革新と産学協同の実現」を目指します。
- ③ **サービスの卓越性**：「自己点検評価システムの成熟」を図り、学生を始めとする学園に関係する方々（顧客）の満足度の向上を目指します。

学園共同体の理解

理念の実現に向けて、学園の学生、理事、教職員は、次のことを理解することが強く求められています。

- 1) 工学アカデミアとは、学園を構成する人々（学生、理事、教職員）が学園共同体の一員として行動する際、意思決定の根底をなす価値群である“KIT-IDEALS”を共有し、お互いが必要な知識や技能を与え合い、共同と共創による知恵の生産を行う場です。
- 2) 教育とは、学生が持つ潜在能力を引き出して総合的に伸ばしていくことです。すなわち、学生の「知性、感性、徳性」を涵養することにあります。教育付加価値とは、本学園における学習や経験全般から獲得した知識や技能だけでなく、価値観や態度を包含する総合的な「人間力」です。
- 3) 学園の活動は、学園を構成する人々（学生、理事、教職員）や企業、保護者、社会等の要求に応える「サービス」を成熟させ、その卓越性を追究することです。



学園共同体の理想

学園創設者の泉屋利吉翁は、学生・理事・教職員の三位一体で構成する学園共同体の理想を掲げ「工学アカデミア」の建設に全力を傾けました。学園創設期においては、学生を“*Young gentlemen*”と呼び、彼らの自律と自主的な活動を支援し、自由と活気ある学園の樹立に心がけました。特に、直接、その設立を企画した穴水湾自然学苑は、豊かな自然の中で教職員と学生が寝食を共にし、規律ある共同生活を送ることにより、お互いの信頼関係の構築と学園共同体の理想を実現せんとするものでありました。傍ら、教職員の資質向上を図るため、教職員の学内外への留学制度を構築し、全ての教職員に教育者としての自覚を強く求めました。

初代校長・学長の青山兵吉先生は“*Truth*(真理)” “*Theory*(理論)” “*Technology*(技術)”を当時の学園の記章に三つの“*T*”として込められ、学園を「知を求める場」「知を生産する場」とされ、本学園卒業生が我が国産業界において指導的役割を担う技術者・研究者として活躍することを強く念じ、また信じておられました。学術に生きる青山兵吉先生の純粋で崇高な願いと言動は、当時の教職員には忘れ難いものがあります。

第2代大学学長の京藤睦重先生は、学生の学力や資質を直視され、多年にわたる教育者としての信念に基づき、学園共同体の理想を「親切な学園である」との言葉に込められ、学生との信頼関係を構築する軸として、基礎学力の向上を目的とする徹底した教育訓練を展開されました。特に、「努力すれば、必ず報われる」と学生に熱く語りかけておられた姿や「誠意をもって学生に対応すれば、学生は必ず応えてくれる」と自ら率先して学生と向き合う活力ある行動は、教職員を励ますのみならず、学外の多くの方々から支持されました。

私は、“*KIT-IDEALS*”を標榜するにあたり、学園が組織として重視すべき価値と位置づけた・“*Kindness of Heart*”（思いやりの心）は、京藤睦重先生の教育者としての学生を思う心を・“*Intellectual Curiosity*”（知的好奇心）は、青山兵吉先生の学者としての純粋な崇高さを・“*Team Spirit*”（共同と共創の精神）は、泉屋利吉翁の学園共同体の理想を追求する闘志に満ちた活動をそれぞれ想起し定めたものであります。

また、学園を構成する（学生、理事、教職員）個々人が重視すべき価値として位置づけた・*Integrity*（誠実） ・*Diligence*（勤勉） ・*Energy*（活力） ・*Autonomy*（自律） ・*Leadership*（リーダーシップ） ・*Self-Realization*（自己実現）は、創設者を始めとして、歴代の学長・校長が話されたり、学生を諭された言葉の数々から、その思いを要約させていただいたものであります。

学園を構成する人々（学生、理事、教職員）が生涯にわたる「行動」を通して自己実現を目指され、学園共同体の理想実現に寄与されますことを念願するものであります。

平成14年1月

理事長 泉屋 利郎

学園共同体の信条

「学園共同体が共有する価値」に基づく信条（行動規範）

この学園に集う私たちは、学園共同体として共有すべき価値を“KIT-IDEALS”としてまとめ、これらに基づく信条を定めました。これを学生、理事、教職員が常に意識し、尊重することによって学園共同体の向上発展を目指します。

K	Kindness of Heart	思いやりの心	私たちは「素直、感謝、謙虚」の心を持つことに努め、明るく公正な学びの場を実現します。
I	Intellectual Curiosity	知的好奇心	私たちは「情熱、自信、信念」を持つことに努め、精気に満ちた学びの場を実現します。
T	Team Spirit	共同と共創の精神	私たちは「主体性、独創性、柔軟性」を持つことに努め、共同と共創による絶えざる改革を進め、前進します。
I	Integrity	誠実	私たちは、誠実であることを大切にし、共に学ぶ喜びを実現します。
D	Diligence	勤勉	私たちは、勤勉であることを大切にし、自らの向上に努力する人を応援します。
E	Energy	活力	私たちは、活動的であることを大切にし、達成や発見の喜びを実現します。
A	Autonomy	自律	私たちは、自分の行いを律し、1人ひとりを信頼し、尊敬します。
L	Leadership	リーダーシップ	私たちは、チームワークを大切にし、自分の役割を自覚しつつ、責任を果たします。
S	Self-Realization	自己実現	私たちは、自らが目標を持つことを大切にし、失敗に臆することなくさらに高い目標に向かって挑戦することに努めます。

学生宣言

本学の学生全員が所属している学生団体である学友会は、各学年の議員より選出された全学議員等で開催する全学議会において、学生自身が本学学生としてのモラルや倫理の向上を図るため、下記の「学生宣言」を採択した。

1. 我々学生は、学生の本分と社会のルールを守ります。
2. 我々学生は、「KIT-IDEALS」を行動規範として、人間力を備えた「自ら考え行動する技術者」を目指します。
3. 我々学生は、倫理を守りその実践に取り組みます。

平成18年5月17日 第39期 学友会

教育の卓越性について

昭和52(1977)年、読売新聞は「勉強する大学もある」との見出しで、本学の教育の取り組みを紹介しました。当時は、京藤睦重学長のもと、基礎学力の充実に向けた補充教育に熱心に取り組んでいる大学として、一部の教育関係者から高い評価を得ることができました。

第2代京藤睦重学長は、新聞社のインタビューで「大学の価値は、大学入学者の偏差値の高さにあるのではなく、大学4年間で身に付けた『教育付加価値』の大きさにある」と述べられました。当時、わが国の教育に、付加価値という言葉はまったくなじみがなく、教育関係者の中でも賛否が分かれ大きな波紋を呼びました。爾来本学は歴代の学長が「教育付加価値日本一」を目指す取り組みを進め今日に至っております。第5代石川憲一学長は、平成7年「知識から知恵に」を標榜する教育改革に着手され、教育実践の目標を「自ら考え行動する技術者」の育成と定めた取り組みが図られた。

そして、現在の大澤敏学長は、「世代、分野、文化を超えた共創教育の実現」を提唱し、新時代における教育改革に取り組んでいます。この教育改革は、多様性と価値の共有に基づく、イノベーション創出ができる人材育成にあります。今日、予測困難な時代において持続可能な社会構築を自らの力で目指す人材の育成が求められています。

○人間形成基礎教育／K：Kindness of Heart（思いやりの心）の学習

「思いやりの心」の本質は、自己の確立にあると考えています。他を尊重し、理解し、行動するためにはまず自分がなければなりません。さらには、「読む、書く、聞く、話す、考える」を高いレベルで育成し、他人とコミュニケーションできる能力の育成が重要です。自分の思いを相手に正しく伝えることができ、他人の思いを理解し尊重できることが社会人として求められる最も基礎的な能力と考えています。

本学は、この「思いやりの心」を育む基盤となる学習を人間形成基礎教育と位置づけています。人間形成基礎教育においては、日本の歴史、文化、伝統、科学技術の歴史と倫理、日本および国際社会の理解を通じて、社会人・技術者としての考え方を育成しようとするものです。特に、自然学苑で実施する「人間と自然」は、チーム活動を通して学生相互の啓発と自己の考え方をより熟成させ発展させることを狙いとしています。本学の人間形成基礎教育は、読む、書く、聞く、話す、考えるなどの基礎的能力の育成と、歴史観、倫理観、社会観の涵養に努め、「思いやりの心」の本質の理解と展開につなげることを目標としています。

○修学基礎教育／I：Intellectual Curiosity（知的好奇心）の学習

受動的で、消極的な若者が多数を占めるようになった今日の社会において、その対応策にさまざまな意見があります。さらに、「学ぶ意欲」の欠落は、学力低下問題と相まって、わが国の将来に対する重大な不安定要因となっています。

しかしながら、私たちは、若者にとって自主的で主体的に行動することがいかに困難で勇気のいることであるかについての認識が不足していると考えています。私たちは、まず彼らを励ますことから始めなければなりません。「意欲」の背景には、自信や活力さらには希望や目標といったものがあり、「知的好奇心」が求める「情熱、自信、信念」に通ずる取り組みを必要としています。

本学の修学基礎教育は、学生に「やればできる」という自信、自分の将来に対する希望、考えることへの興味、目標に挑戦する勇気を持たせることに努め、学ぶ楽しさと喜びを実現して、「知的好奇心」の本質の理解と展開につなげることを目標としています。本学に入学してくる様々な履修歴を有するフレッシュマンに対して、工学・科学技術への興味、基礎学力の調整、本学における勉学の方法、自己の目標を持つことの大切さの理解を通じて、学生が主体的に行動できる教育を目指しています。

○プロジェクトデザイン教育／T：Team Spirit（共同と共創の精神）の学習

現在、科学技術における「創造性」が強く求められています。創造性の背景には、独創性、主体性、柔軟性を始めとする多くの価値群に基づく能力の発揮が必要となります。私たちは、1人の人間がすべての能力を獲得し創造性を発揮できるようになることは極めて困難であると考えており、チームとして互いに補い合いながら創造性を追究し、発揮することは可能であると考えています。また、このようなチームの一員としての創造性発揮の経験は、個人の能力向上にも著しく貢献すると考えています。

本学のプロジェクトデザイン教育は、「知識から知恵に」を標榜する教育改革の軸となる教育として独自に開発したものです。教育課程の所定のレベルにおける「知識、技能」を総合的に応用することで、問題発見と解決方法の考察を行い、さらに効果的にプレゼンテーションする能力の育成を目指しています。この総合化の過程において最も重要なことは、チームワークの大切さを認識することにあります。少人数によるグループ学習の中で、チームで活動することの喜びや、また難しさを体験することが重要であると考えます。

プロジェクトデザイン教育においては、チームによる創造性発揮の機会を与え、チームワークの大切さと、個人の役割における自覚と責任、主体的な行動、柔軟な発想と対応、多様性と独創性の理解を通じて、「共同と共創の精神」の本質の理解と展開につなげることを目標としています。

○専門教育：IDEALSの学習（自己の確立）

科学技術の著しい進展は、専門教育における教育分野の高度化・多様化への急速な対応を求めています。一方で学部での4年間の限られた学修期間に実施できる教育の量的側面には限りがあります。しかしながら、大学は解決困難と思われるこうした課題に適切に応える責務があります。

本学の教育改革の方向性に示す「伝達すべき知識の量の精査と質の検証」は、大学としてもっとも重要な課題といえます。教育改革における専門教育の目標は、工学基礎と専門基礎の重視にあるとし、同時に科学技術の変化への対応を可能とする能力の育成と決めました。

変化への対応を可能とする能力には多様な側面があり、一定の枠内に定められるものではありませんが、有能な技術者の方々の努力の足跡や人柄を見た時、本学が学園共同体の信条“IDEALS”の価値群が求めている価値観と、それに基づく行動の重要性が認識されるものであります。

専門教育が知識や技能の学習を目的とするものであることは当然ですが、本学では、学生が卒業後も技術者、研究者として生涯持ち続ける価値観の育成こそが重要であり、これは教員と学生の相互信頼の中で伝達され育まれていくものと考えています。また、教員が日々の教育研究活動の中で示す姿勢、態度、言葉の中に、学生に学んでほしい「価値」が含まれていると考えます。専門教育においては、教員を人生の師とし、相互の信頼の中で知識や技能を与え合うことを通じて「IDEALS」に基づく自己実現の大切さを理解し、行動する技術者の育成を目標としています。

【教育の実践目標】 自ら考え行動する技術者の育成

自ら考え行動する技術者とは、前述のとおり、本学が定めた“KIT-IDEALS”の価値を行動規範とし、自ら問題を発見し、解決のための方策を考え、自分の意図するところや得られた成果をわかりやすく論理的に伝えることのできる人材としています。この目標を実現するために各教職員は、教育の本質である「知性、感性、徳性」の大切さを各授業や学習支援、さらにサービス業務などの中で具体的な行動を通じて示す必要があります。私たちの仕事から、学生の「意欲と行動」を引き出す努力を図り、学生自らが「行動できる」と実感できるような実体験を学習活動全般で取り組む必要があります。そのためには、次の諸点について具体的な実践を必要とします。

- A. “KIT-IDEALS”を規範とする徳性の育成
- B. 何が問題とされるべきかの感性の育成
- C. 解決のための方策を考えるための知性の育成
- D. 自分の考えを論理的に伝えることのできる行動力の育成

本学の教育改革は、これらを全ての教育実践の中に包含し、個々の教員のみならず職員も日常的活動の中に4つの教育を意識的に展開する努力が望まれます。

私たちは、常に意識の中に“KIT-IDEALS”が求めている行動とは何か、学生が自主的、自発的に行動するためにはどうあるべきかを模索し、具体的な実践に結びつけることが必要です。本学園の各組織にとって、学生がそこを訪れるということが行動の第一歩であり、行動の成果の是非が次の行動に大きな影響を与えることを認識しなければなりません。学園の全ての機能が、この教育改革の目標とする「自ら考え行動する技術者の育成」に向けてベクトルをそろえることを強く要望します。

研究の卓越性について

金沢工業大学は開学当初から、わが国産業界の第一線で活躍されている有能な技術者・研究者の方々を本学教員に招聘してまいりました。これは本学における教育・研究が社会と遊離した存在となることを防止するのみならず、産業界の技術ニーズや人材ニーズを的確に把握し、これに応える教育・研究体制の構築を可能としたものです。このことは、本学の「研究の卓越性」を追究する根幹に位置するのみならず、建学の理念に基づく「技術革新」と「産学協同」を実現するものでもあります。

今日、大学に期待するものとして、社会が必要とする創造的研究と大学発ベンチャーの創出が望まれております。同時に、産学官連携の必要性が社会的要請とされつつあり、これまで大学の自治に基づく学術研究の独立を主張してきたわが国の大学の多くが、戸惑いの中で新しい道を模索し始めています。

社会の風潮は、いつの時代も適・不適を問われる傾向がありますが、私たちは、これまでの産学協同の貴重な経験を踏まえて、本学が「なすべきことは何か」「できることは何か」を明確にしていくことが大切だと考えます。一方で、現在の社会の風潮が、本学にとって大きな恵みの風であることも見逃せません。「産学連携」の取り組みは、本学にとって開学当初からの目的であり、これまでの経験の蓄積は他大学の追随を許さぬものがあります。特に、本学に着任された教員と出身企業との個人的な信頼関係を軸とする企業との連携の絆は、本学の貴重な財産であり大切にしなければなりません。

学園共同体が共有する“KIT-IDEALS”の信条に基づく行動を「信頼のパイプ」を通じて産業界に広めていくことが更に重要になっているのです。私たちが「なすべきことは何か」「できることは何か」の視点で、着実な歩みを進めながら、その実践目標を「国際社会に貢献する科学技術の開発」に定め、さらなる努力を重ねます。

○共同と共創

本学は、教育と研究の両面に亘る活動によって社会に貢献する存在にあります。建学理念は、教育と研究における卓越性の追究を求めたものであり、建学以来真摯にその実現に邁進すると共に、その高度化を推進しています。

1人の人間が教育と研究の両面で、ともに卓越性を実現することははなはだ困難なことであり、どうしても一方に隔たった取り組みになりがちになります。大学の内部における理解の矛盾が、ともすれば教育と研究の両面が社会の求める水準や内容になっていないとの批判に繋がる結果を招いたものであり、大学の存在そのものに自己懂着を抱かせるものになっています。

本学においては開学以来すべての教職員に対し、教育に軸足を置いた行動を強く求めてきていますが、一方で産学連携に基づく高度な研究は大学の価値を高めるのみならず、学生に学習の目標や将来の夢を身近に感じさせ、意欲を触発する上で重要な役割を果たしてきたことも事実です。率直に言えば、本学においても教育と研究の両立の難しさを認識しながら、その自己懂着との戦いの連続であったと思います。私たちは、この自己懂着を解決する方法を「共同と共創」に求めています。

現在は、研究における「共同と共創」の高度化を求めて、国際的視野に立つ連携大学院の充実強化と産学連携による共同研究の充実強化を推進し、同時に学外の研究者を共同研究員や、客員研究員などによって招聘し、研究の活性化を一層促進しようとしているものであります。大学は「社会の一員である」とするあたり前のことを自覚し、社会との共創を目指して積極的に大学の教育と研究への参画を、産業界を始めとする社会に求めていく必要があります。

○研究所の整備充実

大学が優れた研究成果を生み出すことを社会は強く求めています。わが国においては、産業界における先端的研究が大学のそれを凌駕するものがあり、また大学の研究が社会のニーズに適合していないとの批判もあります。

「産学連携」においては、その主体がどちらであるかが問題となります。大学は当然のこととしてその主体が大学にあると主張します。産業界は同様に企業の都合を優先した利益を主張します。私たちは多年の経験からお互いの立場が対等であり、「共同」であることが大切であるとしてきました。共同であることの最も重要な鍵は「信頼」にあります。信頼がなければチームは成り立ちません。大学が自律し、その自己実現を目指す姿を社会に認めてもらうことが大切です。

大学が特色ある教育と研究によって、社会に貢献し、社会の尊敬を得られる存在とならなければなりません。私たちは、そのため教員にチームとしての教育・研究活動を求め、「共同と共創」の実現を目指す研究所の開設を推進し、施設設備の充実に努めています。

○連携大学院制度の発足

大学における「教育のあり方」が見えない、解らないことが社会の苛立ちをさそい、今日の大学教育に対する不信や不満に繋がっています。

本学は連携大学院制度を発足し、一部ではあっても教育・研究における「共同と共創」を実現しようと考えています。この連携大学院による双方向の人事交流が信頼のパイプとなり、さらなる広がりを生むべく努力していくことが大切です。科学技術の進展は近年ますますその速度をあげており、大学が社会のニーズのすべてに応えることは物理的にも困難であります。こうした時、産業界の第一線には優れた人材と優れた研究環境が整備されていることが多く、私たちはこれまで羨望の眼差しで見つめてきました。私たちは、これら高度な研究施設と人材に対し、信頼の財産をもって「共同と共創」の実現を求め、学生に先端的教育・研究の機会を与え、技術革新を担い得る人材の育成を目指します。

○社会人教育への取り組み

本学は、科学技術の進展に対応するべく大学院の充実を図ってまいりました。本学園卒業生が約7万人を超えるに至り、卒業生のリカレント教育の場としての機能が大学に求められています。

工学技術者である本学卒業生に対して、企業が求めている能力は、より高度な専門的知識とその応用能力だけではありません。わが国社会の急速な国際化と情報化に伴い、高度なIT技術や、さらには国や企業における知の競争における知的財産権に係る知識や、組織運営や企業経営に必要な知識が求められるに至っています。私たちは、こうした社会の急速な変化に対応するリカレント教育の体制を整備することが卒業生と社会の信頼に応えることになると考えています。

東京・虎ノ門に開設した社会人を対象とする大学院イノベーションマネジメント研究科はこうした社会的要請に応えるべく構想されたものです。今後もさらなる改善と充実を図り、社会的要請に

応える社会人教育を実現したいと考えます。これまで、わが国の産業界においては、各企業が社員を自らの組織で教育し、大学の教育に何らの期待を持たなかった時期が永くありました。しかしながら、産業界を取り巻く環境は著しく変化し、さらにその変化のスピードに対応する能力がこれまで以上に求められています。

今こそ大学が信頼を回復するチャンスであると思います。私たちは社会のニーズを的確に把握し、大学の持てる力を結集することで、社会に貢献し信頼を獲得する取り組みを積極的に推進します。

○研究資金確保の施策

学生納付金が約8割を占める本学財政の現状において、研究にける資金には限度があります。研究のための外部資金の確保は、研究推進の上で最も重要な課題です。教育と研究の両立を目指す大学にとって研究に特化した資金調達とその成果の還元は常に困難な課題でした。

本学は平成6年4月研究支援機構の発足とともに、研究に特化した資金調達を組織的に行う取り組みをスタートさせました。今日幾多の困難を克服して、一定の成果を得る仕組みづくりができました。また知的所有権獲得とこれに基づくロイヤリティー収入の確保の仕組み作りにも着手し、ようやくその糸口が見出せるところまできたと考えています。こうした努力は、今日の社会的風潮の中で多くの大学が試みはじめてきており、今後は競争の中でその成果が求められることとなります。

「共同と共創の精神」に基づく「技術革新」と「産学協同」は、私たちの理念として意識に深く根ざしており、産業界との連携推進を図るパイプがすでに存在しています。私たちは、今後とも本学に対する信頼の絆を大切に、これをますます厚く拡大する努力を行い、「共同と共創」の実現を図り研究資金確保に努める必要があります。

【研究の実践目標】 国際社会に貢献する科学技術の開発

大学における教育研究の高度化の尺度が大学の論理のみによって決められたものから、社会への貢献度によって決められるとする大きな変化がおきていることを認識しなければなりません。社会はすでに国際化の時代にあり、特に科学技術の開発は国際的視野の中で激烈な競争がなされています。こうした時代にあって、本学も国際的視野の中で行動し、競争に打ち勝つ努力と気迫を持たなければなりません。本学が研究実践の目標として定めた国際社会に貢献する科学技術の開発は、本学として成し遂げなければならない重要な目標です。

そして、この目標実現には共同と共創による取り組みが不可欠です。

- ・ 学生との共同と共創による教育研究の実践
- ・ 連携大学院による共同と共創
- ・ 産業界を始めとする社会との共同と共創による教育研究の実践

本学はすでに米国を始めとする多くの海外の大学との連携が実現しており、教育と研究の両面に渡る交流の実績をもっています。さらには、連携大学院や共同研究ラボの設置による教育・研究の交流や八束穂リサーチキャンパスにおける先端技術の創出は、わが国における先駆的な取り組みであり、双方向による人材交流を一層促進するものとして発展させようと考えています。

社会との共同と共創においても、東京に開設したイノベーションマネジメント研究科が社会人を対象とする教育実践において、社会の先端的分野において活躍される企業人を多数客員教授にお招きし、共同と共創による教育研究の実践を実現しています。

サービスの卓越性について

平成11年1月には、第7代泉屋利郎理事長のもと「顧客満足度向上プロジェクト」が発足し、学生を主要な顧客と定義し、業務改善の努力を図っています。主要な顧客である学生のニーズの把握は顧客満足度向上のかなめであります。

学生に積極性がない、意欲がない、目標を持たない、勉強しない、基礎学力がない等々数え切れない不満が大学関係者の声として聞こえてきます。一方、学生には、授業がつまらない、授業が解らない、役に立つと思えない、親切に対応してくれない、何をしてもいいか解らない等々、やはり数えきれないほどの不満があることが分かっています。教育を責務とする側と受ける側の対立した図式の中で、安易に学生の満足度の向上を図ろうとすれば、自己実現に努力する学生のニーズとは違う大学レジャーランド的発想の要求とその対応に気が遠くなるほどの努力が必要となります。

私たちが目指す顧客満足の向上は、こうした相対するものの関係、すなわちサービスを提供する側とサービスを受ける側の関係で考えているものではありません。学園共同体の理想である工学アカデミアは、学生、理事、教職員が三位一体となり活動することによって社会に貢献することを目指すものであり、究極的に言えば、本学の真の顧客は送り出した学生を受け入れてくれる社会なのです。顧客満足度向上プロジェクトが学生を主要な顧客と位置づけ、学生の意欲の触発を促そうとするのは、学生が三位一体の一翼を担う大切な存在であるからです。さらには、毎年卒業していく学生が社会で活躍することが高等教育機関たる大学の最も重要な社会的責務であるからです。わが国の大学には教員 → 職員 → 学生の序列の中で、教員を中心とし、教員を主役とする伝統的な組織運営の歴史があり、未だに大学の一般的な体質となっています。これは研究者たる教員による学術研究の成果としての科学技術の開発が大きな社会貢献に繋がってきたことから、これを実践する教員を大切にし、研究に必要なサービスが提供され、そのことが大学の『目的』とされたからです。

教育と研究の卓越性を追究する本学の立場にあって、学生や教員が互いに顧客の立場を主張するなら、サービスを提供するのは一体誰なのか。これは、大学を構成する人々の意識を混乱させ、職員と呼ばれている人々の意欲を低下させる結果を招くことに繋がります。学生が一方的にサービスを受ける側に立つ限り、サービスの提供を待つ存在としての受動的立場からの自立はありません。教員が研究に対するサービスの提供を、一方的に大学に期待し、大学に依存する限りにおいては、本学の建学の理念とする「人間形成」「技術革新」「産学協同」の実現は望むべくもありません。

私たちは建学以来、学生、理事、教職員が三位一体となって、社会に貢献することを目指す共同体なのです。私たちが組織として重視すべき価値と位置づけた、

■K : Kindness of Heart 【思いやりの心】

私たちは〔素直、感謝、謙虚〕の心を持つことに努め、明るく公正な学びの場を実現します。

■I : Intellectual Curiosity 【知的好奇心】

私たちは〔情熱、自信、信念〕を持つことに努め、精気に満ちた学びの場を実現します。

■T : Team Spirit 【共同と共創の精神】

私たちは〔主体性、独創性、柔軟性〕を持つことに努め、共同と共創による絶えざる改革を進め、前進します。

を学生、理事、教職員が共有する目標と成し、「工学アカデミア」形成の理想実現を図ります。

○教育ニーズの把握と実践（思いやりの心）

学園創設者である泉屋利吉翁は、学生をヤングジェントルマンと呼び、彼らを一人前の大人として常に接しておられました。初代学長である青山兵吉先生は、学生を学徒とされ、学ぶ楽しさを伝えるべく学生に常に話しかけられました。第2代学長の京藤睦重先生は、時には学生を厳しくしかり、時には学生を大いに誉め、学生との深い絆を結ばれました。歴代の学長や教員の方々の魅力あふれた学生との接し方は多様で、すばらしいものがあります。学生にとって自分を認めてくれる人がいる。さらにはその人が人間的に尊敬できる魅力に満ちた人であれば、大きな喜びに繋がるのは当然であります。

学生は本学に進学した段階で、技術者あるいは研究者への道を選択したのです。一部の卒業生は、「泉屋利吉翁が礼儀正しい態度で学生の話に真剣に耳を傾け、その要望を実現しようとされる姿を見た時、自分たちも一人前の人間になればと思った。さらに、青山兵吉先生のように、学生は勉強したくてしょうがない存在だと思い込み、そのように接しられた時、勉強の嫌いな学生にとっては大きな戸惑いと恥ずかしさを感じた。また、京藤睦重先生のように何が何でも一人前の技術者に育てようとの情熱をもって真剣に対応されたときは、自分のためにここまでやってくれるのかと大きな感動を覚えた」と述懐しました。

多くの卒業生が本学園での先生方との「絆」を大切にしていることを知った時、私たちは大きな喜びを感じるものであります。私たちは一人でも多くの学生と「信頼の絆」を結び、技術者、研究者を目指す学生と共に〔素直、感謝、謙虚の心〕を持つことに努め、明るく公正な学びの場の実現を図ります。

○研究ニーズの把握と実践（知的好奇心）

産業界出身の教員が多数在職する本学にとって、産業界の研究ニーズは常に把握できているといっても過言ではありません。本学にとって大切なことは、それが社会に与える影響と学生の教育との関係にあります。

国際社会に貢献する科学技術の開発を活動目標とする研究の卓越性の追究が、研究のための研究であってはならないのです。学園共同体の理想である三位一体は研究においても学生の積極的な参加が求められるのであり、教員と学生の共同、さらには教員と学生、外部の協力者といった共同と共創による研究活動の展開が不可欠なのです。

研究の高度化により学生が置き去りにされるならば、それは本学の研究とは成りえないのです。研究者として成果を挙げられた方たちが異口同音に「現在の研究は若い時の発見や発明に基づく」と語っておられます。もちろんごく少数の天才的な方たちのことを一般論とすることはできないことを承知しています。しかしながら、学生を信じたい、学生と共にありたいが本学の信条である「知的好奇心」の根底にある思いなのです。

私たちは学生に、教育・研究に意欲的に取り組む姿を求めながら教育・研究の高度化を推進し、社会に貢献したいと考えます。研究のニーズは教育のニーズと一体のものであります。私たちは〔情熱、自信、信念〕を持つことに努め、精気に満ちた学びの場の実現を図ります。

○社会ニーズの把握と実践（共同と共創の精神）

かつてわが国の大学審議会は、次の３点による大学改革の必要性を文部科学大臣に答申しました。

1. 教育機能の強化／創造性豊かで時代の変化に柔軟に対応できる人材を養成するため各大学が、それぞれの個性、特色を発揮しながら教育内容を見直し、魅力ある授業を展開していくこと。
2. 世界的水準の教育研究の推進／世界をリードするような研究を推進するとともに、優れた研究者や高度の専門能力を持った職業人を養成するための拠点として、大学院を充実強化していくこと。
3. 豊富な生涯学習機会の提供／生涯を通じて学習する機会を提供していくことができるよう、大学を中心とする高等教育をもっと柔軟で開かれたものに変えていくこと。

これらは、いずれも今世紀のわが国を展望し、社会的必要性の中で大学にその実現を強く求めたものであります。爾来今日まで大学には、ほぼこの３点に集約されるさまざまな取り組みが求められており、今日終戦後におけるわが国高等教育の最大の改革に繋がっているものです。社会のニーズの多様性と変化に、いたずらに目を奪われることなく、先に示された３点を本質とする改革の取り組みを着実に行っていくことが重要です。しかしながら、一方で私たちの思い込みにも注意しなければなりません。私たちの行動が真に社会に貢献するものとなっているかを常に検証し、さらなる努力を積み重ねていくことが大切です。激動する今日の社会にあって、私たちは〔主体性、独創性、柔軟性〕を持ち、社会との「共同と共創の精神」を求め、その実践を図ります。

【サービスの実践目標】夢考房キャンパスの実現

平成5(1993)年7月に夢考房(26号館)を開設し、学生が自主的、主体的に活動できる「モノづくりの場」としました。学生がチームを組み、プロジェクト活動が活発に行われ、今日に至っています。自己開発センターにおいては、資格取得を目指す学生たちが集い、グループとなって勉強する姿が見られます。数理工教育研究センターにおいては、より高度な数学、物理の学習に取り組むたいとする学生たちに特別講座を開講し、グループとなって学習する体制作りが図られています。また、学内でアルバイトをする学生たちにも、各業務関連においてグループ学習を促進する仕組みが実施されています。

私たちは、プロジェクトデザインⅢの発表会やプロジェクトデザインⅠ、Ⅱのポスターセッションを見た時、チーム活動によるいくつかのすばらしい成果が見られ、大きな喜びを感じるものです。また各研究所においても、社会との共創を目指す取り組みに学生が参画し、生き生きとした活動がみられます。さらに、クラブ活動やサークル活動に取り組んでいる学生たちも、勉強との両立に苦労しながらも、粘り強く努力して、競技の成績とは違うすばらしい成果を勝ち得ていると感ずるものです。

今日、わが国の経済は好転していますが、学生の就職環境は今なお発展途上にあります。企業の人事担当者にどういう人材を望んでいるかを問えば、正に本学が教育の目標としている「自ら考え、行動する技術者」像に繋がる回答を得ています。さらに企業の人事担当者に、そうした人材をどのように選別するのかを問えば、大学での活動を、面接等を通じて詳細に確認すると述べておられました。就職先企業は、学生の大学における活動全般を調査対象とし、企業に就職してからの成長の可能性を見いだそうとしています。

こうした時代にあって、学生は大学在学中、自らが主体性をもって活動し、活動の実績を積み重ねることに努める必要があります。また、大学は学生が主体的に活動できる場を提供する必要があります。4年間をなんとなく過ごすことが許される時代ではなくなったのです。この4年間で価値あるものとするのが、私たちに求められております。私たちは学生、理事、教職員が三位一体となって「夢を求め、夢を共有し、共に努力していく大学」でありたいと考えます。本学のあらゆる場所、あらゆる機能を三位一体による共同と共創の場と成す「夢考房キャンパスの実現」を目指します。

知識を知恵に

国際高等専門学校（以下、国際高専）は、社会が求める人材像を「グローバルイノベーター」と定義し、その人材育成プログラムの中核を成す能力開発を「考える力の育成」と定め、国際高専と金沢工業大学（以下、金沢工大）が共同で構築した教育システムを「5＋4」スクールシステムとしています。

今日「グローバルな社会」、「高度な情報化社会」、「高度な知識社会」であることは疑いもなく、人工知能の出現によって、より大きな変革が訪れることが必然とされています。そして、今後益々、人として「高いレベルでの思考力（知恵）」が希求され、この能力の獲得がこれからの社会で最も重要とされると共に、その獲得方法の工夫改善が求められています。

■ 国際高専のED教育

国際高専が開発したエンジニアリングデザイン(ED)教育の特色は、人間が本来持っている「人を助ける、人に役立つ行動を誘発する思考である『洞察する力』『観察する力』『共感する力』」を育てることによって、「着想・インスピレーション」という感性を育み、「発想・アイデアを創出する」、更には「設計・形を作り出す」というデザインシンキングプロセスを繰り返し経験し、チームで思考錯誤しながらお互いの探究力を深め、新しい価値を創出する能力である「考える力の育成」を目指しています。

特に、この「考える力の育成」を企図するスタート時期として、人間の感性が最も研ぎ澄まされると言われる「15歳からの高等教育」には大きなメリットがあると考えており、このスクールシステムの有効性を感じています。18歳からは、金沢工大の1年次・2年次生との共創学修を行います。

■ 金沢工大との共創教育

金沢工大は、現在、米国・マサチューセッツ工科大学とスウェーデン・チャルマース工科大学が2000年に共同で発足した工学教育の世界標準である「CDIOイニシアチブ(2019年9月現在:40ヶ国、173機関が加盟)」が提唱する教育スタンダード(12のフレームワークから構成される)に加盟し、CDIOシラバスで求められる教育実践「Conceive(発想・考え出す)→Design(設計する)→Implement(実行する)→Operate(運用する)プロセス」をプロジェクトデザイン教育に取り込み、1年次から4年次、更に大学院教育の中核に位置づけることによって、社会実装を視野に入れた教育研究に取り組んでおり、国際高専の学生は「5＋4」スクールシステムにおいて「知識を知恵に」する実践を繰り返し体験します。

■ グローバルイノベーター

知識が価値であった時代から、社会が求める「新しい価値(イノベーション)」が必要となり、これを生み出せる人が大切にされる時代が到来しました。新しい価値を生み出すプロセスの中で、最も大切なことは「チームを組んで共同作業に取り組む、共創の体験」にあります。

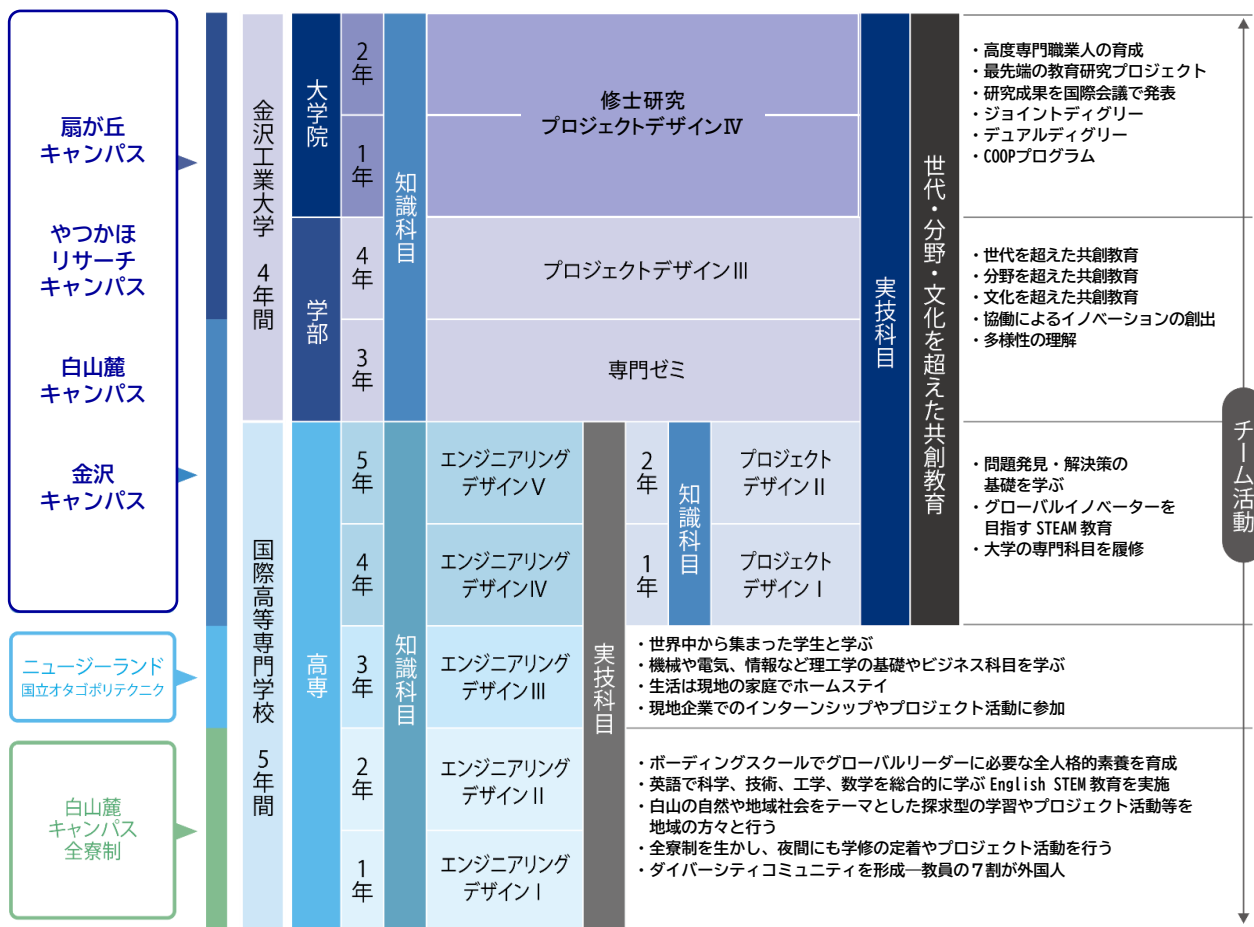
多様な経験、多様な視点、多様な知識を持つ人達がチームとなって、問題発見・解決のために熱い議論を繰り返し、知恵を絞り出す中で培われる「人間力」を、高いレベルで持つ人のことを、「グローバルイノベーター」と称し、これからの新しい社会で求められる技術者のリーダーとして活躍する人材の育成を目指します。

グローバルイノベーターを目指す 15歳からの高等教育

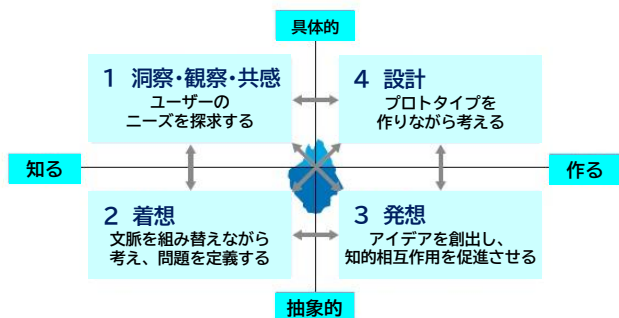
5+4の9年間一貫教育

国際高等専門学校 金沢工業大学

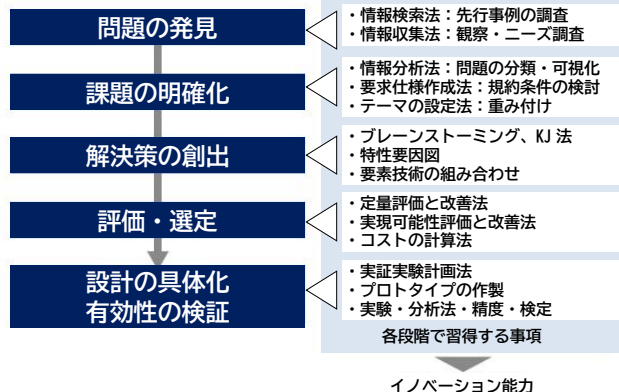
グローバルイノベーターとは、決まった答えのない課題にチャレンジし、言葉や文化、専門分野を超えて、さまざまな人々と協力しながら、新しい価値を生み出していく人々のことです。私たちは金沢工業大学と連携しながら、国連に加盟する世界193カ国が同意したSDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）の17の目標を念頭におき、地域の課題や地球規模の課題解決に貢献できる人材を育成します。



■ エンジニアリングデザイン教育（国際高専の5年間）



■ プロジェクトデザイン教育（金沢工業大学3年次編入後）



国際高専 2025 In Sight

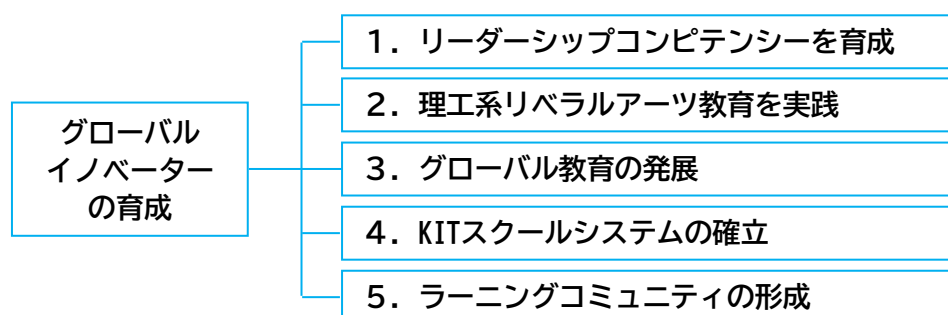
平成30(2018)年4月、本校は学校名を金沢工業高等専門学校から国際高等専門学校（以下、国際高専）に変更し、電気電子工学科、機械工学科、グローバル情報学科を統合した「国際理工学科」を、新たに建設した白山麓キャンパスにてスタートさせました。

1、2年次は大自然に囲まれた白山麓キャンパスで、授業の多くを英語で学ぶ全寮制教育を行い、地方創生に寄与する様々なプロジェクト活動に取り組みます。3年次はニュージーランドの提携校に全員が1年間留学し、4・5年次は金沢キャンパスで隣接する金沢工業大学生との共創教育を実施します。

国際高専は、我が国の先駆となる理工学教育を着実に成功へと導き、KITスクールシステムを基盤とし更なる発展を遂げることを目的に「国際高専 2025 In Sight」を策定しました。

<教育目標> グローバルイノベーターの育成

<Our mission> To educate leaders of global innovation



1. リーダーシップコンピテンシーを育成

本校が描くグローバルイノベーターは、最新の理工学知識や洞察力を持つだけでなく、創造的な解決策を用いて、新しい価値を生み出す機会を見つけることができる人です。それだけでなく、様々な分野の専門家たちと効果的にコラボレーションすることができ、文化や価値観の多様性を尊重し、より良い世界の実現に向け、変革の波を起こすスキルを持つプロフェッショナルでもあります。

このような能力を、私たちはディプロマ・ポリシー（9つのリーダーシップコンピテンシー）に定め、その育成を目的に以下の教育を推進します。

1) 社会に貢献するリーダーとしての人間力を形成する教育を推進します。

- 自らのMissionをベースに社会的な視点から課題設定を行い、リスクを恐れず達成に向かうリーダーとしての人間力を形成する

- 2) グローバルに活躍できるコミュニケーション能力を育成する教育を推進します。
- 日本と世界に関する教養を備え、多様性の中で自らの価値を認識し発揮できるコミュニケーション能力を育成する
- 3) イノベーターに相応しい卓越した科学技術力を習得する教育を推進します
- 早期からの基礎固めと、金沢工業大学と連携した幅広い学問領域の探求により、多角的な視野で価値を創出できる卓越した学力を身につける。

9つのリーダーシップコンピテンシー

① 革新への挑戦

信念(高い志・強靱な意志)を持って行動し、失敗に臆することなく粘り強く挑戦し続け、自身やチームを成功へと導くことができる。

② 社会的使命感

地域社会や自然環境に関心を持ち、社会的な課題の解決に使命感を持っている。

③ リーダーとしての高潔

グローバルな環境でリーダーシップを発揮しつつも、謙虚で他者への思いやりを持ち、尊敬される人格である。

④ コラボレーション

チームで目標を達成するために、自分の役割と提供できる価値を認識し、積極的に貢献する。

⑤ 多様性とアイデンティティ

多様な文化・芸術・歴史観・宗教観・価値観を理解するための基礎的な教養を持ちつつ、その中で自らの考えを持っている。

⑥ 心を動かす力

考えを論理的にまとめたうえで、相手の立場や気持ちを考慮しながら効果的に伝えることができる。

⑦ 価値創出

幅広い学問領域の探求とデザインシンキングの実践により、これまでにない価値を創出することができる。

⑧ 自然・社会・産業と結びつけた科学的思考

科学技術を自然・社会・産業の面から理解・分析し、自分の考えを述べることができる。

⑨ 常に学び続ける姿勢

確実に身に着けた基礎を土台として、常に新しい知識やスキルを獲得する姿勢を持っている。

2. 理工系リベラルアーツ教育を実践

不確実性が増す社会にあって、教育の中心は知識の獲得ではなく、問題発見・解決の思考方法やそのプロセス、並びに自ら考える力をしっかりと身につけさせることにあります。

本校は、デザインシンキング・IT・モノづくりを学び、問題発見・解決型の創造的チーム活動を行う「エンジニアリングデザイン」を柱に、英語による理工学的思考力を育む「English STEM」と、地域創生活動など人間力を鍛える「課外活動プログラム」とを統合した理工系リベラルアーツ教育を実践し進化させます。

1) 考える力、デザイン能力を高めます。

- 洞察力を養い、多角的な視野で問題を理解し、機会を発見する能力を養成する。
- 批判的・分析的思考を磨き、決まった答えのない問題の解決策を探る。
- 挑戦することによる失敗を歓迎し、試行錯誤の過程から多くのことを学ぶ。

2) STEM教育により、理工学の広い知識・スキルの修得を図ります。

- 研究やプロジェクト活動等を通じて、問題解決に必要な知識をつくりだすプロセスを学ぶ。
- 学んだことを統合し応用できる能力を養成する。

3) SDGsの17の目標を念頭に、様々な社会課題に取り組みます。

- 技術者倫理、資源環境、モノのライフサイクルなど、SDGsの観点から多面的に考える力を養う。
- 身近な社会課題が地球規模の課題に結びつくことを理解し、自身のミッションを発見する。
- 「第二のふるさと」である白山麓のステークホルダーとして、自然環境の保護や地方創生活動に取り組む。

4) 世界的工学教育CDIOの理念を織り込んだ社会実装型教育を展開します。

- 産業界の実践 (Conceive-Design-Implement-Operate) に沿った体験型学習を通じて、創造的知識・スキルをしっかりと身につける。

3. グローバル教育の発展

本校は、グローバル人材育成のフロントランナーとしての気概を持ち、これまでに培った教育力・国際交流のネットワークを生かし、本校の「国際化推進に関する方針」が示すように戦略的に学校全体のグローバル教育を発展させます。

1) グローバル人材としての基礎力を育成します。

- 自国の文化を理解し、自身のアイデンティティを形成する。
- 国際的な体験を通じて、異文化を理解し尊重する態度を養う。
- 世界の人々と協働して新たな価値を生み出す経験を積む。

2) 学生および教職員の海外協定校との交流を更に発展させます。

- ラーニングエクスプレスやサービ斯拉ーニングなど、プロジェクト型の海外短期派遣プログラムを推進する。
- 海外インターンシップやコープ教育など、長期体験型のプログラムを推進する。
- 国際交流ネットワークを生かし、教育研究活動を充実・発展させる。

4. KITスクールシステムの確立

国際高専（5年間）と、金沢工業大学及び大学院（4年間）の9年一貫教育により、「グローバルイノベーターの育成」を強力に推進する「KITスクールシステム」を創設し、2018年4月よりスタートしました。KITスクールシステムは、学年が進むにつれて教育環境を変え、より複雑な課題に取り組むことができます。

本校は、最適な場所で最大の成果を生む教育に尽力します。

1st Stage：1、2年次は、自然豊かな白山麓キャンパスのボーディングスクールで学ぶ

2nd Stage：3年次は、全員が1年間のニュージーランド留学・ホームステイを経験する

3rd Stage：4、5年次は、金沢工業大学生と世代・分野・文化を超えた共創教育に参加する

4th Stage：大学編入学以降は、高度な研究環境でイノベーションプロジェクトに取り組む

1) 広く豊かなキャリア形成を支援するシステムを構築します。

- KITスクールシステムのカリキュラム作成・実施及び継続的な改善を行う。
- 広い理工学の基礎をつくり、個々の学生の希望に基づき専門性を深めていくきめ細かな学習指導・キャリア支援を構築する。

2) 教育の目的に沿って効果的に統合された授業を実施します。

- 協働性・創造性などの汎用的スキルや、リーダーシップ・倫理などの人間力も、知識を獲得する過程で同時に養成する授業を実施する。
- 一般教養と様々な専門分野を、目的や達成目標に沿って統合した授業を実施する。
- 講義、探究、議論、創作、発表、省察が、効果的に組み込まれた授業を実施する。

3) 金沢工業大学との共創教育を推進します。

- 長期のインターンシップや留学などを組み込んだコースを設ける。
- グローバルイノベーター育成のために産学連携教育を推進する。
- それぞれ異なる能力や背景を持つ学生、社会人、外国人の混合チームによる共創プロジェクトを実施する。
- 海外からの留学生にとって魅力的な学習環境を整備する。

- 4) KITスクールシステムの教育・学習支援システムを整備します。
 - 修学アドバイザーが、個々の学生の学習指導、履修アドバイスを行う。
 - 個々の学生の成長にあわせた9年一貫の学事システムを整備し運用する。
 - 新しい教育に適合する学事・成績・活動評価システムを整備し運用する。
- 5) 学校運営及びKITスクールシステムの継続的な改善を図ります。
 - IR委員会を設け、教育・学習状況を把握・評価し、継続的な改善を図る。

5. 最上のラーニングコミュニティの形成

ラーニングコミュニティとは、学生と教職員が主体的に学び合い人間性を高め合う“場”です。“KIT IDEALS”を行動規範とするラーニングコミュニティでは、学生と教職員の個性・多様性が尊重され、キャンパスライフがカラフルと感じる“場”を創造します。

- 1) ダイバーシティが確立された学校をつくります。
 - 広く全国から学生が集う学校を目指す。
 - 帰国子女や海外からの留学生を増やし、多様な学生が集うキャンパスを実現する。
 - 理工学が女性にも面白い分野であることを周知する。
 - 世界に教員・職員を求め、外国人の割合を確保する。
- 2) 入学から卒業・修了までをしっかりとサポートする仕組みをつくります。
 - ポートフォリオシステムを活用し、きめ細かな学生指導を行う。
 - キャリアアドバイザーが学生のキャリア形成をサポートする。
- 3) 学生と教職員が共に学ぶ学校をつくります。
 - 学生同様、教職員も常に学ぶ精神と機会を持つ。
 - 全教科にてアクティブラーニングを推進する。
 - 革新的な教育技法やツールを積極的に活用し、より効果の高い授業を実現する。
 - イノベーション、チャレンジ精神のある教職員の行動を奨励する。
- 4) 地域連携教育を推進します。
 - 地域連携・産学連携を推進し、創造的で実践型の教育プログラムを実施する。

私たちは、この「国際高専 2025 In Sight」に示す計画の達成をめざし、グローバルイノベーター育成のための教育を実施し、将来にわたり無くてはならない学校と成ることを目指します。



〔令和4(2022)年1月〕

再生紙を使用しています。